

JET からの手紙

岩手に恋した国際交流員

元岩手県国際交流員
宮静

国際交流員（CIR）として、黄金の国・岩手県に勤めることができ、幸運でした。社会人になってから初めての仕事で、私のキャリアの原点でもあります。

岩手県の第一印象

岩手県は本州の東北部に位置し、本州で面積の一番大きい県です。東京までは新幹線で約130分。当時の私は、世界遺産の「平泉―浄土建築と庭園及び考古学の遺跡群」、マルコ・ポーロが輝かしい中尊寺を遠くから眺めて日本を黄金の国と名づけたこと、以上の情報しか知らない状況で赴任しました。私にとっては冒険でした。

4月11日、東京から盛岡行きの新幹線の車内で、「白龍のじゃじゃ麺（盛岡の名物料理）」について書かれた記事を読みました。迎えに来てくれた県職員の方にそのことを伝えると、わざわざその料理を食べに連れて行ってくれました。それが、盛岡で最初の味でした。

東京では桜がすでに散り始めましたが、岩手県庁の周辺、特に盛岡城跡公園の桜がとても綺麗だったことを覚えています。



お世話になった文化交流課の仲間たち

おいしい、綺麗、優しい―これが岩手県の第一印象でした。

CIR という仕事

岩手県庁にはアメリカ、アイルランド、中国から3人のCIRがいました。私の仕事は主に、中国関係交流イベントの通訳・翻訳、県民の中国文化理解促進のための国際交流活動への協力、県庁職員への語学指導、県内在住中国人向けの中国語ラジオ放送などでした。仕事の内容はどれも新鮮でしたが、多岐にわたっており、うまくできるかどうか不安でした。しかし、周囲の皆さんのサポートのお陰で、ひとつひとつ困難を克服し、その達成感は私の励みにもなりました。

通訳・翻訳の仕事においては、所属の文化国際課以外にも、産業経済課、観光課、そして国際交流協会からの業務もありました。政治関係、経済、観光、生活、震災のしおりに至るまで内容も幅広いものでした。日本語を10年間勉強してきた私にとって、翻訳・通訳の仕事をいただけることは、子供がおいしいアメ玉をもらうような嬉しさと同じ気持ちです。心を込めて事前の準備を整えることや、同僚からの熱心な指導、またイベントで「自分がいるからこそ相互理解を深められる」と思えることなど、どれも私のエネルギーになりました。

県民の中国文化への理解のための協力としては、主に県内小中学校及び福祉施設など向けのイベントがありました。文化講座、ゲーム、一緒に餃子（中華料理）を作って食べたりもしました。イベント前には、相手や要望に応じて、真剣に講座の内容と形を考え、クイズを盛り込んでみるなど、面白さと体験を重視しました。正直、私も中国文化の専門家ではないし、中華料理も上手に作る



文化交流講座の様子

ことはできません。しかし、これらの準備を通じて、あらためて自分の国の文化について勉強することができ、中国文化を再認識することができました。

JET プログラムには毎年、中期研修があり、各地の CIR が集まって経験をシェアし、互いの良いところを吸収してネットワークを築きます。翻訳・通訳研修および日本語教育研修も行い、自身の能力を向上できたことは、仕事への助けになりました。

岩手県に恋した

「CIR は最高の仕事！」と、私はよく友達に言っていました。CIR の仕事を始めてから、徐々に CIR という仕事に恋し、そして岩手県に恋をしました。

私が岩手県の何に恋をしたかという、ひとつは、同僚の仕事に対する真面目さです。たとえ 15 分間の知事表敬でも、その中には様々な内容が散りばめられ、事由、来訪者、背景、岩手県との交流状況、座席、プレゼント、職員分担、司会など、どれをとってもその真面目さは一目瞭然です。

また、民間の職人さんの作品に対する姿勢です。岩手県の南部鉄器は世界中で有名です。釜定工房の宮さんは、

岩手県を代表する職人の一人です。彼は、材料となる二種類の鉄を私に見せてくれたことがあります。「鉄器は人間と同じ、見た目はほぼ同



小学生が描いてくれた似顔絵

じでも中身の違いは大きい」と、彼は話してくれました。自分の心に忠実であり、作品にも忠実である姿勢に、私は感銘を受けました。

そして、県民



最後、見送りに来てくれた仲間たち

の優しさです。

学校訪問の後には、いつも学生さんから感謝の手紙をもらい、その中では感謝のほかに、岩手県の美しい食・風景などの紹介もありました。盛大な「さんさ踊り」に参加したこと、花見や花火、誕生日を祝ってもらったり、家に招待していただいたことなど、すべて忘れられない思い出となりました。

雨ニモマケズ

雨にも負けず 風にも負けず 雪にも夏の暑さにも負けぬ…岩手県出身の作家、宮沢賢治の名作「雨ニモマケズ」の冒頭です。

2011年3月11日の東日本大震災の後、岩手県民は雨にも負けず、陸前高田の一本松のような強さで復興を進めています。私は中国に戻ってから、青少年交流事業および文化関係の仕事が続けており、日中大学生交流イベント、生け花や着付けなどの日本文化紹介などに携わっています。私にできることは、微力ではありますが、日中の相互理解を少しでも深められるよう努力することです。感謝の心を忘れず、「雨ニモマケズ」の精神で、日中文化交流の道を歩んでいきます。

プロフィール



宮静

中国遼寧省生まれ、北京第二外国语学院日本語学科卒業。2012年～2014年 岩手県庁で国際交流員を勤め、現在は北京日本文化センター（国際交流基金）勤務。趣味は茶道や生け花、整理術。

JET LETTER

恋上岩手

宫静

作为一名国际交流员，有幸来到黄金之国岩手县，入职县厅文化国际科，这是我步入社会的第一份工作，是我工作生涯的原点

岩手初印象

岩手县位于本州东北部，是本州面积最大的县，距离首都东京乘坐新干线最快仅需 130 分钟。有日本国内第 16 项世界遗产“平泉—净土建筑和庭园及考古学上的遗迹群”，马可波罗书中所记载的黄金之国即因看到其中的金光闪耀的中尊寺。只从资料上知晓这些，便只身赴任。4 月 11 日，从东京乘坐去往盛冈市的新干线上，读到一篇回忆盛冈的白龙炸酱面的文章，于是下车后，来东京接我的尾张女士和 RoLy 带我来吃，这是盛冈最初的味道。4 月中旬的东京，樱花已经纷纷飘落，岩手县厅附近尤其是盛冈城迹公园的樱花开得刚刚好。

好吃，好看，人也好——我的岩手初印象。

JET 工作漫谈

县厅有来自美国，爱尔兰和中国的共三名国际交流员。我所承担的工作主要有中国相关交流活动的翻译，促进县民对中国文化的理解等交流活动的协助，面向县厅职员进行的中文讲座，面向居住在县内中国人的中文信息广播等。工作内容新颖丰富，尽管担心自己做不好而不安，其带来的巨大的成就感也激励我不断前行。

翻译工作分为口译和笔译。除了所在科室的翻译工作，也会有产科、观光科以及国际交流协会所拜托的。范围遍及政治、经济、观光、生活等。学习了近 10 年日语专业的我得到翻译的机会，好似孩童得到了好吃的糖果，每次接到工作都特别开心。翻译开始前精心进行的资料准备，同事悉心的指点，活动中因为自己的存在而促进了双方的深入理解等，都成为我内心的养料。

促进县民对于中国文化的理解，主要面向县内的中小学以及市民活动中心。展开形式也多种多样：文化讲座，一起做游戏，一起包饺子做中华料理等等。每次讲座前，会根据面向群体以及要求，精心设计讲座内容与形式，加入猜谜游戏环节，增强互动体验性。其实，我本身并非研究中国文化的，而且也不会做中华料理，所以准备的过程对于我更是一个重新认识自

己国家的过程，在日本反而学习了在本国所忽视的中国文化。

JET 项目每年还会安排中期研修，各地的 CIR 聚集一堂，分享经验，取长补短，共享资源。翻译研修以及日语教育研修更是可以提高 CIR 自身专业素养，可以更好的完成工作。

恋上岩手

一直和朋友说：最美好的工作也许就是国际交流员的工作了。渐渐地发现自己恋上 CIR 的工作，恋上岩手。

眷恋来自同事对于工作的认真负责。仅仅 15 分钟的知事会见，事由，来访者，背景简介，与岩手的交流史，座次图，礼品简介，职员分工，主持词等等，详细周全且一目了然。

眷恋来自于民间手艺人对于作品的执着追求。比如岩手的南部铁器享誉世界，釜定工房的宫先生是其代表之一。他曾经向我展示过两种制作铁器的生铁的内部样式，铁器和人一样，表面看起来没有太大不同，可是内在的差异如此之大。坚守内心，忠于作品。

眷恋来自于市民的善良热情。每次去学校访问后，都会接到孩子们写给我的厚厚的感谢信，信中还会向我介绍岩手的美食美景。一起参加盛大的三萨舞节，赏花，看花火，受邀去家里共度节日，为我庆祝生日等等，我期盼友谊长存。

不怕风雨 勇敢前行

不畏风 不畏雨 不畏冰雪冬，这是岩手文学家宫泽贤治《不怕风雨》的开头部分。

虽然经历了 3.11 大震灾，岩手的人民不惧风雨，如陆前高田的一棵松般勇敢实现复兴之业。我也心怀感恩，在中日文化交流的路上前行。回国后继续从事心连心青少年文化交流活动以及文化相关工作，比如开展中日大学生交流活动，举办花道和服讲座等，希望为两国人民的相互理解尽上自己的绵薄之力。

Profile——简介

宫静 来自中国 北京第二外国语学院日语专业硕士毕业。2012 年~2014 年 岩手县厅国际交流员 (CIR) 现就职于北京日本文化中心 (日本国际交流基金会)。喜欢茶道、花道和整理术。

中国語